

2020年度  
八戸学院大学短期大学部  
幼児保育学科  
推薦入学試験

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かない。
- 2 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用する。
- 3 問題冊子に印刷不鮮明、ページの落丁などがあるときは、手を挙げて監督者に伝える。
- 4 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。

次の文章を読んで、下線部「威勢のいい、大きな声にあふれている」とはどのようなことか簡潔に説明し、文章全体に対するあなたの考えを 600 字以上 800 字以内で書きなさい。

私の祖父は明治の人だった。幼いころ言われた。「きみが本当に正しいと思うなら、叫ばなくていい。なるべく小さな声で話さない」。なぜか最近よく思い出す。

いまの世が威勢のいい、大きな声にあふれているからだろうか。攻撃的なつぶやき、<sup>ののし</sup>罵りあい、みなが言葉を強く発する時代。「小さい声」などだれも聞かない、ダメなものに思える。亡き祖父は何を考えていたのか。

東京大学教授の阿部公彦さん<sup>まさひこ</sup>(52)の著書を読んでいて、気になる文章をみつけた。「負けたり、弱かったり、だめだったりする。そんな言葉が社会の中でむしろ意味を持つこともある」とあった。

阿部さんを訪ね、祖父の言葉について聞いてみた。唐突な問いにもかかわらず、英文学者は教えてくれた。「英語では大事なことを言うときに、あえて強調ではなく、『Perhaps(もしかすると)』と表現をぼかすことがある。小さい声もそうではないですか」。

大切なことは強い断定調では逆に伝わりにくくなる。愛をささやくとき、親しい人を失ったとき、簡単に言えない何かを伝えるとき、私たちはむしろ弱く、あいまいに言葉を使ってきた、と阿部さんは言うのだ。

「心の底に 強い圧力をかけて／<sup>しま</sup>蔵ってある言葉／声に出せば／文字に記せば／たちまちに色褪<sup>あ</sup>せるだろう」(茨木のり子「言いたくない言葉」)。やっと口にする、消え入りそうな声だからこそ、相手に届く何かがある。もしかすると、祖父はそう言いたかったのかもしれない。

朝日新聞・天声人語 (2019年9月15日)